川の子ども新聞 2003秋号

上毛新聞

ぼくは利根川の水の精「ポトム」。利根川の源流でポトンと落ちた1滴の水から生まれたんだ。ぼくといっしょに、川と水のことを学んでみよう。

●もくじ

P1　川にまつわる話
P2-3　藤原ダム探検
P4-5　群馬の川の水質マップ
P6-7　環境にやさしいダム
P8　ポトムの楽校

高津戸峡(大間々町高津戸・渡良瀬川)

川にまつわる話 4

板橋　春夫

◆高津戸のねじり木

渡良瀬川にある高津戸峡の崖に、かつて道了権現を祭る道了堂がありました。この堂は、一八三一(天保二)年秋に訪れた文人渡辺崋山の『毛武游記』にも描かれています。

一九四七年のカスリーン台風で渡良瀬川が増水し、道了堂とそばにあった滝の渦が押し流され跡形もなくなりました。

しかし、ねじり木の信仰は近年まで残り、いまでもねじり木が奉納されています。わがまであったり、かんの虫の強い子の場合、親が願掛けをして治るとお礼返しにねじり木を奉納する習わしでした。道了堂の下が「はね滝橋」で、その下流に「高津戸橋」が架かります。

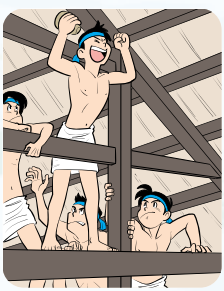
◆洪水の記憶が蘇るヤッサ祭り

利根郡月夜野町小川島の若宮八幡宮で行われるヤッサ祭りは、裸の男たちが「ヤッサ、シンジューロウ」と叫びながら走り回る勇壮な裸祭りです。

九月二十九日夜、鉦たたきを先頭に本殿の周りを男たちが右回りに七回まわります。男たちは本殿の板をドンドンとたたいたり、「ヤッサ、モッサ、シンジューロウ」と大声を上げ、本殿と鳥居の間を何度も行き来するのですが、これは蛇がのたうっている様子を示すと言われています。

途中、本殿の覆い屋に登ったりしますが、最後に本殿前の鈴をもぎり取ります。小川島は昔、洪水に見舞われた常習地帯で、名胡桃城の大木新十郎という武士が洪水のときに腰に紐をつなげて逃げた故事によるといわれています。

この祭りは、蛇と地元の神様の戦いを模したものであると考えられていますが、いずれにしても利根川の洪水の記憶が残されている祭りの一つです。



◆カエルが小便しても水が出る

邑楽郡板倉町や明和町などの低湿地では、「カエルが小便しても水が出る」と言われています。洪水の常習地帯であり、水害のときに活躍する水塚や揚げ舟のことは、小学校の社会科副読本に取り上げられているので知っていると思います。板倉町には一九七九年の調査で一五〇〇棟ほどあった水塚も、二〇〇一年の調査では一五三棟と減少しています。この水塚は住宅よりも一段高く土盛りをして水害に備えた施設です。一緒に使われた揚げ舟も堤防ができて使われなくなりました。

板橋春夫(いたばし・はるお)
一九五四年生まれ。館林歴史民俗研究会代表。近著に『暮らしの中の民俗学』第一巻(五月書房)、『吉田松文庫』(二〇〇三年)。現在に、春駒りと時鮭の民俗(『明治期民俗誌全集解説』二十号、二〇〇三年)がある。

『参考文献』・萩原康次郎『間々はゆりかご』(講談社、一九九一年)、『祭礼』(『新田郡誌』)、『群馬県』(おうふう、一九九六年)、『渡船』(文化財調査研究誌)、『六曽』(板倉町教育委員会、二〇〇一年)